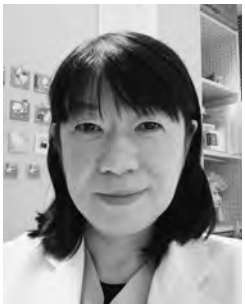
素顔拝見



歯科麻酔学

佐　藤　由美子

“患者総合サポートセンターの佐藤です。”と言っても、この歯学部ニュースの読者の多くの方にはあまり馴染みがないかもしれません。元々は歯科麻酔を専門としていた私ですが、今は主に患者総合サポートセンター（通称：患サポ）で、附属病院の医科診療科に通院中で歯科治療を必要とする患者さんを、受診へと橋渡しをする仕事をしています。

歯科麻酔科の私がなぜ？と思われるかもしれませんが、学問としての歯科麻酔学には全身疾患を持つ患者さんが安全な歯科治療を受けられるようにマネージメントするという側面もありますので、決してかけ離れたものではありません。麻酔を専門にしてきたことで得られた知識を役立てられればと思い仕事をしています。とは言え全く手術麻酔から離れたわけではなく、週１回ですが、中央手術室で全身麻酔をはじめとする業務にも携わっています。

出身は長岡市で、高校を卒業するまで中越地区で過ごしました。すっかり新潟市での生活が長くなりましたが、中学・高校を過ごした長岡の街を時折訪れるたび、当時を懐かしく思い出します。

冬の長岡市は魚沼地区には及ばないものの、それなりの積雪があります。学生時代は割と本気のスキー授業がありました。友人や家族ともスキーに出かけましたので、当時は少しくらい滑れるようになった気になっていましたが、大学卒業後はすっかり足が遠のいていました。それが数年前、外勤先の先生やスタッフに誘われて、久しぶりに滑ったスキーの気持ちよさにすっかり魅せられてしまい、今では冬の雪が待ち遠しいほどです。“あなたの趣味は？”と聞かれれば、ためらわずにスキーです、と答えるでしょう。

昨年からはスキーをするために筋トレがしたくてジムにも入会しました。残念ながら最近は少しサボりがちで、夫からの“ジムに課金してるだけじゃないの？”という言葉が胸に刺さります。COVID-19の感染拡大が落ち着くまでは難しいと思いつつも、冬の便りを聞き始めるとなんとなくソワソワする毎日を過ごしています。

座右の銘、というほどではないですが、“あきらめたらそこで試合終了ですよ？”という、漫画“スラムダンク”の安西先生の言葉を心に留めるようにしています。

医学の進歩は、以前なら助けられなかった多くの命を救い、人はずいぶん長生きするようになりました。“一病息災”ではないですが、今、大学病院の歯科を訪れる患者さんの多くは、何かしらの全身疾患を抱えており、合併症を持つ患者さんを診療する機会は格段に増えています。

“どうすれば患者さんに安全で快適な治療を提供できる？”

そんなことを患者さんに向き合うたびに思います。

難しいことも多いですが、安西先生の言葉を胸に秘めつつ、その人にとってのベストを一緒に考えられるような医療者でありたいと思っています。

どうぞよろしくお願いいたします。

2021年11月
中央手術室にて

顎口腔インプラント治療部

高　嶋　真樹子

こんにちは。顎口腔インプラント治療部の高嶋真樹子と申します。病院の中央診療部門所属で、学生さんとは接点がほとんどないと思いますので、今回は簡単に自己紹介をしたいと思います。

出身は千葉県柏市です。進学を機に新潟に住み19年目となります。新潟の湿り気が多くて曇りがちな静電気が起きない気候は、暑いのが苦手な私の気性にも合っていたようで、冬の寒い横殴りみぞれ雪の日でも上下防水パーカーを着用して濡れずにウキウキで通勤しています。住めば都とはこのことですね。

さて、私は研修歯科医終了後の2009年４月に顎口腔インプラント治療部の前身である顎関節治療部に入局しました。当初は大学院へ進むつもりは微塵もなく、卒後２-３年目は外来診療ばかりが楽しかったために顎関節症・インプラント・補綴の治療をひたすら行っておりました。なにしろ当医局のミニマムリクワイヤメントは、顎関節症と口腔インプラントと補綴歯科の専門医（あるいは専修医）を３つ取得するといったものなので、それはもうやりがいがあります。しかし卒後４年目くらいになると、ただ診療を行うだけではなく外来の医療現場で感じた疑問や気になることについて、さらに知識を深めていきたい、そのことを患者さんへ還元したいと感じるようになりました。そこで、卒後５年目に社会人大学院に入学し、顎関節症の筋活動に関する研究と、インプラントの予後に関わる因子の研究を行うようになりました。卒業後も現在に至るまで、継続して臨床に直結した研究を行っています。

普段の生活では、その時期折々の季節を感じられるようなことを楽しみながら美味しいものを食べることが大好きで、食に貪欲に生きております。春の始まりのころにはお雛様を飾りながら山菜や春野菜を食べ、梅雨には梅シロップ漬けを作成し、苦手な暑い時期は大葉とショウガの効いた鯵のなめろうを好物として、乗り切ります。秋は低山登山や飼っている犬を連れてキャンプに行きます。屋外の食事は何を食べても美味しいですね。冬は海を見るのが好きです。荒々しい波が海岸へ打ち付けてはひいていく様子を見ていると、心の中で起きていた波は、逆に穏やかになり、すっきりとした気分になります。幸い自宅から海も近いので、寒い冬の休日の朝に海鳴りがかすかに聞こえるだけで落ち着きます。そんな自宅で家族と、釣り方によるスケソウダラの鮮度の違いや、寒ブリの刺身の厚さによる食味の違い、またハタハタの産卵場所と時期について調査しており、食に関する知識を少しずつ蓄えていくのが楽しみとなっています。

上記だけ読むと、食べるのが好きなだけの人みたいですが、それ以外に、近世～近代にかけての建築物や庭園を見たりすることをするのも好きなことのひとつです。次の素顔拝見の機会があれば、ぜひその魅力についてもご紹介したいと思います。

❄

医療連携口腔管理治療部

曽　我　麻里恵

2020年10月より医療連携口腔管理治療部に配属となりました、曽我麻里恵と申します。

出身は新潟市で新潟大学歯学部42期生です。卒業してまだそんなに経ってないつもりでしたがもうそろそろ10年になってしまう事実を前に、月日の流れの恐ろしさを感じるばかりです。

学生時代は軽音楽部に所属させていただいていましたが、ギターのFのコードを抑えられないという初心者が最初にぶち当たる壁に見事に激突し「これは向いてないな」と早々に楽器を諦め、所

属期間中ほぼボーカルに専念させてもらっていました。わりと好き勝手させてもらっていたので当時のメンバーや部員のみんなには感謝です。

卒後、進路をぼんやり考えていたところで軽音部の顧問であった林先生から「うちが向いていると思うよ」とお声がけいただき、歯科放射線科に入局し、診療や研究に携わらせていただきました。入局当時は何をもって向いていると判断してもらえたんだろうと疑問でしたが、放射線治療患者さんの口腔管理の仕事をさせていただき始めて、悟りの如く「なるほど、これだな！！」とやりがいをみつけることができました。特に頭頸部放射線治療患者さんは治療期間も長く、大変な思いをしながら治療を頑張っていることが多く、歯科医としてその手助けをしながら一緒に困難を乗り越えていくのはお互いに達成感がかなりあります。

それから放射線治療や化学療法を行う患者さんの口腔管理をメインに仕事をさせていただき、このたび2020年に設立された医療連携口腔管理治療部に所属させていただく機会を得ました。自分が最もやりがいを感じた周術期口腔管理をやらせていただけており、仕事に対して毎日「楽しい」と感じることができています。医科歯科連携がどんどん進み、患者さんも増えてきており、スタッフ一丸となって毎日診療に明け暮れる日々です。当部は一緒に働いてくださる方を常に待っていますので、ご興味のある方はいつでもお声がけください。

ところで私の趣味というか生きがいは好きなバンドのライブに行くこととそれに合わせて旅行をすることだったのですが、このコロナ禍でバンドはほぼ活動休止状態になりライブ予定も丸１年以上白紙が続き、旅行そのものも自粛せねばならず、私生活における楽しみが何一つない虚無の期間を過ごしています。他の趣味も特に見つけられないので飼っている猫に対してひたすらウザ絡みをする日々を過ごしていましたがこの夏に重度のアレルギーを発症し、その際の検査でついに「猫アレルギー」の烙印を押されてしまいました（発作自体は猫が原因ではなかったのだけが幸いでした）。猫のいない生活はありえないので毎日アレルギーの薬を服用し、月に１回猫を洗いながら共存しています。洗われるのを全く嫌がらない子でよかったなあと思います。良い子です。

この記事を書いている時点では世の中かなり落ち着いてきており、自粛もわりと緩和されてきているので来年こそは仕事も趣味も充実した生活を送れるようになるといいなと願うばかりです。皆様今後ともよろしくお願いいたします。

❀

歯科矯正学分野

大　森　裕　子

令和３年１月１日より歯科矯正学分野の助教を拝命しました、大森裕子（おおもり ゆうこ）と申します。「素顔拝見」への寄稿の機会をいただきましたので、拙い文章で大変恐縮ですが、自己紹介をさせていただきます。

私は新潟県のどまんなか・見附市で生まれ、長岡市と三条市に囲まれた田んぼの多い、のどかな田舎町で育ちました。周りに医療関係者はおりませんでしたが、娘に手に職をつけさせたいという母の願い50%と、白衣の仕事はかっこいいなというなんとなくのイメージ50%で歯科医師になることを志しました。オープンキャンパスで感じた東京歯科大学千葉キャンパスの、のびのびとしながら充実した環境に惹かれ同大学歯学部へ入学しましたが（現在は東京都千代田区神田へ学部再移転）、程なくして学ぶことの多さと幅広さ、実習の難しさ、何より進級試験のプレッシャーに幾度と無く挫けそうになりました。そんななかでも同級生同士励まし合い、体育会系で熱意に溢れた先輩や先生方による手厚い指導に支えられて、無事歯科医師になることができました。

臨床研修は、一般的な歯科治療を網羅的に経験したいという考えから、新潟大学歯科総合診療部で１年間お世話になりました。私の出身大学では

病院実習で学生が担当患者を持たせてもらえるということはなく、診療アシストや見学がメインでしたので、学生時代すでに自ら主体となって治療を経験している新潟大学出身の同期と自分とを比較しては不安や焦りを感じていたことを覚えています。当時の担当ライターの先生には、外部からきた自分を区別して懇切丁寧に指導していただき、前を向いて研修に臨むことができました。

臨床研修修了後には、自分の強みとなるような専門性を身に付けたいという点と、ひとりひとりの患者さんと長く向き合えるという点から矯正歯科を学びたいと思い、縁あって新潟大学歯科矯正学分野に入局させていただきました。矯正治療では、ひとりの患者さんの初診から管理が終了するまでの経過が長く、個々の状態が非常にバリエーションに富んでおり、成長発育の要素が複雑に絡み合うことからトレーニングに必要な期間が長く、現在においても判断に迷うことに日常臨床で多々遭遇します。それでも入局してから９年目のいままでの間に、患者さんの第Ⅰ期治療を担当してから第Ⅱ期治療、その保定が終了して終診するまで担当できるよう、医局の先生には育てていただきました。わからないことが理解できるよう、できないことができるようになるまで根気強く、向き合っていただいたことにこの場をお借りして感謝申し上げます。歯科医師を志してから現在に至るまで多くの尊敬する先生に出逢い、叱咤激励いただき、返し切れない程の御恩があります。「受けた恩は後輩に還元すべし」、先輩方がおっしゃっていた言葉です。これまでに自分がいただいたものを、これからは少しずつでも後輩に返していけるよう、日々の臨床・教育・研究に邁進していく所存です。今後とも宜しくお願い致します。

❀

小児歯科学・障がい者歯科学分野

笹　川　祐　輝

2021年４月より、小児歯科学分野の助教に拝命いただきました笹川祐輝（ささかわ ゆうき）と申します。この度、歯学部ニュース編集ご担当の先生より「素顔拝見」の原稿作成につきまして貴重な機会をいただきましたので、簡単に自己紹介をさせていただきたいと思います。

生まれは神奈川県横浜市、その後父の仕事の都合で様々な土地を転々としました。ここは説明しようとすると少々長くなってしまうのですが、横浜（出生～１歳）→アメリカ（１～７歳）→横浜戻る（７～10歳）→千葉（10～12歳）→新潟（12歳～現在まで）という経緯になります。このややこしい経緯のため、「出身はどちらですか？」という、普通なら簡単に答えられる質問に少々考え込んでしまいます。生まれたところ？幼少期を過ごしたところ？「新潟です」と答えてしまうのが面倒にならないのでそうしていますが、本当は生まれ育った土地ではありません。すみません。

高校卒業後、現役で入学したのは新潟大学教育学部（理科教育専修）でした。歯学部が第一志望でしたが圧倒的に偏差値が足りず、冒険できない性格の私は安全志向の受験することになります。歯科医師が無理なら、子どもと関われる幼稚園か小学校の先生になりたいと思っており、そのための履修を進めましたが、次第に第一希望の歯学部受験に挑戦できなかった心残りを強く意識するようになりました。そして同年夏頃から、「休学せ

ず単位取得を進めながらこっそり歯学部再受験の勉強も進める」を決意します。この方法なら、歯学部受験に失敗しても何も失うものがないので、ノンプレッシャーで挑戦できると考えたからです。半ば歯学部を諦めるための記念受験でもありましたが、合格発表の日に自分の受験番号を発見した時の衝撃は今でも鮮明に覚えています。

歯学部入学後、様々な専門診療科について学ぶ中で最初に魅かれたのが小児歯科でした。教師の道を捨て、歯科医師を選べば子どもと関わる仕事はできなくなると勝手に思い込んでいた私にとって、最も魅力的な診療科でした。

数々の試験に悪戦苦闘しつつも何とか歯科医師免許を取得し、研修を終えた後に、小児歯科学分野へ大学院生として入局させていただき、今に至ります。大学院生時に取り組んだ研究テーマは、小児の摂食動作を口唇圧と三次元動作解析の観点から解明を行うものです。学位を取得した現在も、より発展的な知見を得るため、この研究に励んでおります。

臨床、研究、そして教員としての仕事に従事しながら、現在は障害者歯科学会の認定医取得と小児歯科学会の専門医取得に向けて日々の診療に邁進させていただいております。

最後になりましたが、私の専門である小児歯科学を通して歯学部、歯科界において何かしら貢献できるよう、これからも様々なことに挑戦していきたいと思っています。拙文ながら、最後までお読みいただきありがとうございました。どうぞ今後ともよろしくお願いします。

❊

摂食嚥下リハビリテーション学分野

那小屋　公　太

2021年４月１日付で摂食嚥下リハビリテーション学分野の助教を拝命致しました、那小屋公太（なごやこうた）と申します。摂食嚥下機能回復部の助教を３年程務めておりましたが、本年度より歯学部で職務に励む機会を頂きました。今回、素顔拝見執筆の機会を頂くことができましたので、この場をお借りして自己紹介をさせて頂きます。

出身は秋田県秋田市です。苗字の“那”という漢字が沖縄の“那覇”を連想させるらしくよく沖縄出身ですか？？と聞かれますが先祖代々生粋の秋田県民です。しかし、この“那小屋”という苗字は珍しく、全国でもうちの家系しかいないそうです。なので“那小屋”という苗字をみかけたら全員私の親族だと思ってください。そんな家に産まれた私ですが、地元の秋田高校を卒業後は、全国を転々としておりました。実家が薬局ということもあり医療系の職を志していたのですが、予備校に通うために移住した東北６県憧れの大都会“仙台”は田舎者の私にとって魅力的過ぎ、勉強もせずに遊び呆けてしまいました。その結果、医療系をあきらめ、金沢大学理学部に入学したわけですが、これがまた自分には全く合わず１年足らずで中退してしまいます。仙台に戻り今度こそはと真面目に勉強し、なんとか入学した先が北海道大学歯学部でした。大学ではバトミントン部に所属し、学業との両立を目指し日々鍛錬しておりましたと言えればかっこいいのですが、残念ながらそんな生活は一切送っておりません。このご時世あまり大きな声では言えないのですが、まずよく酒を飲みました。16時15分に授業が終わるのですが、終わったとたん爆チャリし16時30分にはアジア最北の大歓楽街・すすきの（映画『探偵はBARにいる』から引用、大泉洋がナレーションで言っていました）に到着（早めにお店に入ると安いんです）、夜中まで梯子酒。今思えば若さが為せる技ですが、同期と過ごした楽しい時間はかけがえのない思い出です。

北海道は美味しいものが沢山あります。ジンギスカン、ホッケ、ラーサラ、花まるの寿司など数えきれない程おすすめのものがあります。そんな環境で生活を送った影響もあり飲み食いが非常に好きな私は、病棟実習で口腔癌術後の摂食嚥下障害患者さんを初めて目の当たりにした際に衝撃を覚えたのを今でも鮮明に覚えています。“食べる

ことができない”患者さんがいる、しかも歯科の患者さんでいる。それ以来、私は口腔全体を“機能的”に見ることができる『摂食嚥下リハビリテーション』という学問に非常に興味を抱きました。北大病院で臨床研修を終了した私は、口腔関連疾患以外が誘因となる摂食嚥下障害を学びたいと思い、昭和大学歯学部口腔リハビリテーション医学部門に大学院生として入局。研究のため配属された口腔生理学教室での研究生活があったおかげで私は臨床と研究を両立できる機会を求めて大学院終了後、新潟大学へ入職しました。新潟大学へ入職してはや5年近く経ちますが、この5年間は同じ志を持つ仲間たちと切磋琢磨し、とても密度の高い充実した日々を送っています。

私は全国を転々としておりますが、今が一番心地良いです。新潟大学歯学部、摂食嚥下リハビリテーション学分野への発展に少しでも貢献できるよう日々邁進していく所存です。今後ともよろしくお願い致します。

摂食嚥下リハビリテーション学分野

吉　原　　翠

助教に就任して

2021年4月1日付で摂食嚥下リハビリテーション学分野の助教を拝命いたしました吉原翠（よしはら　みどり）と申します。このたび「素顔拝見」執筆の機会をいただきましたので、自己紹介と近況を述べさせていただきます。

出身は新潟県下越地方に位置する新発田市です。読みづらいですが「しばた」と読みます。

新潟大学歯学部歯学科に45期生として入学し、卒業後は本学研修プログラムAコースの歯科総合診療部での臨床研修を経て、本学大学院に進学しました。大学院では摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授・辻村恭憲准教授のご指導のもとで、「咽喉頭酸逆流によるTRPV 1の持続的活性化およびそれに伴う機械刺激誘発性嚥下の変調」について研究を行い、現在も関連した研究を継続しています。

TRPV 1は、熱刺激に応答する温度感受性イオンチャネルの一つであり、温度刺激の他、カプサイシンの辛味刺激や酸刺激・痛み刺激を受容する性質が知られています。今年のノーベル生理学賞受賞者はこのTRPV 1を発見したDavid Julius教授と、機械刺激を受容するイオンチャネルPiezo 1・Piezo 2を発見したArdem Patapoutian教授でした。彼らの発見から温度・疼痛・圧力を感じるメカニズムについて飛躍的に研究が進み、慢性疼痛の治療等の臨床にも役立てられています。

大学院生の時には訳も分からず始まった研究でしたが、このような基礎的な発見を経て、自分の学位研究を含めた数々の実験が、そしてその先に臨床が成り立っているのだと思うと、微力ながら研究に携わる身として、非常に感慨深いものがございます。

最近の出来事としては、2021年8月に日本学術振興会の海外特別研究員に採択されました。来年度以降に渡航の予定ではありますが、世界的なCOVID-19感染拡大の影響を受け、出発時期は決まっておりません。場所は以前に当分野の辻村恭憲准教授が留学されていた、ジョンズホプキンス大学のAsthma & Allergy Centerの予定です。大学があるのはメリーランド州のボルチモアという街ですが、留学経験のある先生方のお話では、なかなか治安が悪い地域ということです。生まれてこの方新潟県下越地方以外で暮らしたことがない人間が、アメリカで無事にサバイバルできるだろうかと不安を感じることもございますが、研究のみならず多くの面で成長できる機会と信じ、励んでまいりたいと存じます。

最後に、未熟者ではございますが歯学部の発展

に貢献できるように精一杯務めさせていただきますので、今後ともご指導ご鞭撻の程何卒よろしくお願いいたします。

❄

口腔生命福祉学講座

松　本　明日香

本年４月１日付で口腔生命福祉学講座の助教を拝命いたしました松本明日香と申します。

この度、素顔拝見の執筆の機会を頂きましたので、この場をお借りして自己紹介させていただきます。

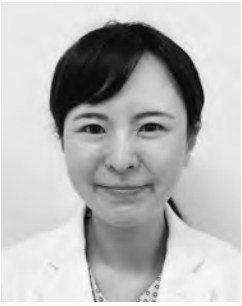
出身は五泉市（旧村松町）で、高校までは田んぼと山の景色の中で育ちました。本が好きだったので、高校卒業後は早稲田大学文学部に進学し、日本文学（主に近代）を勉強し、社会人となりました。そして30歳を目前に控え、「なにか資格でも取ろう」と思い立ち、新潟市西区の明倫短期大学歯科衛生士学科に社会人入学しました。それまでは本一辺倒な生活でしたが、10歳も年の離れた同級生と一緒にまったく畑違いの歯科衛生士の勉強をするのはとても新鮮でした。

そして短大卒業後、もう少し勉強してみようと思い、口腔生命福祉学科に編入しました。新たに福祉の勉強と、４年次には臨床実習も加わって忙しい学生生活でしたが、仲間や先生に恵まれ、充実した学生生活を送ることができました。卒業後は大学院に進学し研究を進める傍ら、未就学児対象の療育教室に勤務し、発達障害のお子さんの療育支援に携わりました。音楽や手遊び、体を動かす遊びなどを通して、お友達とのかかわり方や集団生活でのルールを身に着けられるように支援を行っていました。日々子どもたちと追いかけっこをしたり、お散歩に出かけたりするので、インドアな私にとっては、これまでの生活で一番体を動かす毎日でした。そんな風に日々一緒に過ごしていた子どもたちを小学校に送り出すことができたのは、とてもいい思い出です。

療育教室を家庭の都合で退職したのちは、雪国新潟県から南国沖縄県に引っ越しました。沖縄では、市役所の障害福祉課に相談員として勤務し、いろいろな年代の方の相談支援に従事しました。新潟から引っ越した身にとっては、沖縄の暑さや風習に戸惑うことも多かったのですが、市役所の相談員の同僚たちに助けられ、新しい仕事の中で障害福祉を学ぶことができました。

そしてご縁があり、本年４月から口腔生命福祉学科の助教として大学に戻り、現在に至ります。学部生のころからお世話になっております講座の先生方にご指導いただき、４月からは通所福祉施設の知的障害者の方々を対象に、よりよい歯科保健指導ができないかと模索しています。これまで学んできた歯科衛生と福祉という分野横断的な研究ができ、忙しくも充実した毎日を過ごすことができています。この恵まれた環境で仕事ができることに感謝しています。今後は歯学部や口腔生命福祉学講座の発展に貢献できるよう努力してまいります。どうぞご指導の程よろしくお願いいたします。

❄



生体組織再生工学分野

鈴　木　絢　子

2021年４月より高度口腔機能教育研究センターの特任助教を拝命致しました、鈴木絢子です。素顔拝見執筆の機会を頂きましたので、この場をお借りして簡単に自己紹介をさせていただきます。

私は、新潟県五泉市の出身で、水が綺麗で、山と田んぼに囲まれた自然豊かな地に生まれました。小学校の登下校には公園や林があり、木登りしたり、お花を摘んで帰ったり、下校時間をとっくに過ぎているのに帰宅しないため、母はよく心配していました。中学生になっても、毎日部活と生徒会活動に明け暮れ、夏場は川に行けば友達が

いたので、部活帰りに川で遊んで帰り、冬場は授業返上で雪遊びと、常に自然と触れ合い成長してきました。このような環境で育ったことで、好奇心旺盛で細かいことは気にしない性格になりました。

中高生頃からすでに、好きなことはとことん追求し、嫌なことはできたらやりたくない…という偏ったところもあり、理系科目は得意だったことから、高校生時代は研究職もいいなぁ、なんて夢をみたこともありました。父は進路についてよく相談に乗ってくれて、「女性は結婚や出産もあり、資格はあったほうが生きやすい」という考えや、歯科医師であり薬剤師である父の経験と私の興味から、薬学部と歯学部を目指しました。

結果的に歯学部を選択し、大学院から新潟大学小児歯科学分野に入局しました。もともと子供が好きだったからこそ、「歯医者は子供から嫌われる職業かぁ…」と小児歯科を何となく敬遠していた頃もありました。しかし、入局後は考えを改め、「子供も一緒に楽しめる歯科治療を行う」ことが私の中で目標となり、2015年より6年間、小児歯科学分野にて臨床を行っておりました。小児や障がいを持つ患者さんとの治療は体力も精神力も消耗しますが、それ以上に楽しさややりがい、治療への情熱が勝り、私には合っていたんだなぁとつくづく感じております。

それと同時に大学院では生体組織再生工学分野を専攻し、泉健次教授のもと、新規培養口腔粘膜の開発の研究を行っておりました。高校生の時に一瞬夢見た研究をまさか歯科医師になってから行うとは思っておらず、当初は右も左も分からない状態でした。しかしながら、大学院で研究を進めていくうちに、どんどん深みにはまっていき、結果が出た時の何とも言えない興奮、アドレナリンが出る感覚は経験しないと分からないものだと思います。大学院卒業後も臨床の傍ら研究を継続し、今年度は研究メインで活動を続けております。

私生活では、結婚後5年が経過しますが、ようやく子を授かることができ、執筆時（2021年12月時点）で妊娠8か月となります。掲載される頃はすでに生まれているのでは？と思いますが、今は不安も楽しみも入り混じった気持ちです。もともと食べることが大好きでしたが、妊娠してからより一層、食に対しての執着が強くなったような気がします（食事の制限や食べてはいけないものなどもあることからでしょうか）。お米マイスター厳選のお米やご飯のおつまみのお取り寄せ、パン作り、パエリア作り、お菓子作り…。意外となんでも手作りできることに気づき、料理は良い気分転換になっている気がします。きっと出産後は育児に追われてこんな余裕はなくなるんだろうなと思い、今のうちに好きなことをやっておこうという気持ちもありますが、子供が大きくなったら一緒にお菓子作りしないなぁなんて妄想を膨らませております。

拙い文章ではありましたが、お付き合いいただきありがとうございました。新潟大学歯学部や再生医療分野において貢献できるよう精進してまいりますので、今後ともよろしくお願い致します。

高度口腔機能教育研究センター

日　吉　　巧

令和3年4月1日付で高度口腔機能教育研究センターの特任助教を拝命いたしました、日吉巧（ひよしたくみ）と申します。この度、「素顔拝見」のお話をいただきましたので、この場をお借りして自己紹介いたします。

出身はいわゆる下町と呼ばれる東京都北区です。子供の頃は、犬や金魚、インコといった一般的なペットから、カタツムリや蝶、カエルやダンゴムシといった特殊なペットを十数種類飼育するなど、生き物が大好きな少年でした。また、祖父が静岡で漁業権を持ち、海に潜って魚を銛で突いたり、タコを素手でつかんだり、岩にへばりついたアワビを素手で引きちぎるなどの奇行が大好きで、親を心配させることの多い子供だったと思います。その反動か、今では虫に全く触れられなく

なり、極端な生き物好きが子供に遺伝しないことを祈るばかりです。

中学・高校は駅伝で有名な東洋大学の付属校に通っておりました。どちらも男子校であったため、のびのびとしながらも、むさくるしい環境に青春時代のすべてをささげました。六年間硬式テニスに打ち込み、一度だけ大会で入賞することもできました。一方で、黄色い声援を受ける相手に、試合結果以前の敗北感を覚えることも多かったです。そんな母校は今では跡形もなく取り壊されてしまい、きれいな男女共学の校舎へと変貌を遂げたため、後輩には恨めしさを持っています。

高校卒業後は、歯科医師である父親の背中にあこがれ、46期生として本学歯学部に入学しました。11年前の受験当日は市内に81センチの記録的な大雪が降っており、とんでもない大学を受験してしまったと後悔したことを覚えています。大学生活での一番の収穫は、１年の夏に付き合い始めた現在の妻と出会えたことです。付き合い始めの頃は、たくさんの先輩に必ず別れるだろうとの予言をいただきました。当時はなんてひどいことを言う人達だろうと思いましたが、確かに歯学部内の狭い世界では、付き合い続けるカップルはほぼなく、結婚まで至ったのは奇跡と思っております。今では可愛い娘（虫好き）を一人授かり、慣れない子育てに奮闘する毎日を送っています。

もともとは父の医院を継ぎ、臨床的な歯科医師となる以外の選択肢は考えておりませんでしたが、六年生の臨床実習の際に、多部田教授にお声がけいただき、歯周診断・再建学分野にて大学院生となりました。研究は微生物感染症学分野の寺尾教授・土門准教授のご指導の下で行い、研究者としてのイロハを教えていただきました。その後も様々な良いご縁を、そして多くの支援をいただいて、現在の立場があることに心から感謝しております。

最後となりますが、新潟大学歯学部の発展に寄与できるよう、日々研鑽を積んでまいりたいと考えております。至らぬ点も多々あるかと存じますが、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

う蝕学分野

永　田　量　子

2021年４月１日付で歯の診療科の助教を拝命いたしました、永田量子と申します。この度、素顔拝見執筆の機会をいただきましたので、この場をお借りして、自己紹介等をさせていただきたいと思います。

私は、群馬県太田市の生まれで、高校まで実家で過ごしておりました。大学進学は一度東京の美術大学に進学し、そこで４年間ひたすらデザインや絵画、陶芸や金工など多岐にわたる製作活動に勤しんでおりました。美術の教師免許も取り、このまま就職かなと思っていましたが、大学４年の夏ころにふと、この技術は歯科に活かせるのではと思い、新潟の日本歯科大学に入学を決意し、新潟に参りました。第２の大学受験を許してくれた両親には本当に感謝しております。

大学卒業後は新潟大学医歯学総合病院で研修させていただき、そのまま新潟大学大学院に進学させていただきました。もともと、エンド分野にとても興味があり、大学院ではう蝕学分野を専攻し、野杁教授の元でう蝕治療やう蝕病原細菌に関する知見を深めさせていただきました。大学院在学中は胃がんでお馴染みの*Helicobacter pylori*（ピロリ菌）に関する研究を主に行い、ピロリ菌は以外と歯科分野と関係があることに驚きを感じました。ピロリ菌の培養は癖があってなかなか最初は失敗しましたが、今では、ピロリ菌培養の高みに登りつつあるかもしれません。現在は、口腔と胃のピロリ菌がどのように関係してくるのかを研究中です。

趣味は、絵を描くことはもちろんなのですが、昔から山での魚釣りが好きで（群馬は海がないから…）、最近は阿賀野市や胎内市などに釣りに行くのが楽しいです。釣りに行って、つれた魚をその場で焼いて食べるのは最高です。また、基本的

に暑い時期に行くので汗をかいて、運動した！と気持ちよくなれるのがまたいいですね。岩魚や山女は特に美味しくて、釣るのに頑張った甲斐があったな〜とか、山は気持ち良いな〜と感動できます。早く新型コロナウイルス収束しないかな…。また、全く方向が違うのですが、半年ほど前に趣味用のPCを購入し、ほぼ毎日いじくっています。予想以上に面白いもので、もっと早く買えばよかった…と後悔しています。ただ、ずっとデザインを描くためにMacを使用していたため、Windowsの操作に慣れなくて、探したいファイルが行方不明になることもしばしばです。冬は雪で外に出られないから、PCで遊ぶぞと今から意気込んでいる次第です。

最後になりましたが、群馬、東京に並ぶ第３の故郷になっている新潟です。現在進行形で体験しているこの環境は２度と得られないものですので、貢献という形で新潟に少しずつお返しできたらと考えている次第です。

今後ともどうぞよろしくおねがいいたします。